

平成二十四年度年史企画展

「燦たる理想をめざして——大学昇格九十周年記念展——」の記録

年史編纂室

明治の終わりごろからすでに本学は「関西大学」の名称を使っていたが、実態は専門学校令による学校であり、

大正七年（一九一八）に大学令が施行されてからは、この法律に準拠して大学に昇格することが本学関係者の悲願となった。

そのために大阪財界の巨頭である山岡順太郎を総理事として迎え、積極的な募金活動を展開するとともに、校地の確保や学舎の建築、教員やカリキュラムの整備などを行い、ようやく大正十一年（一九二二）六月五日に念願の大学昇格を果たした。平成二十四年（二〇二二）は、このときから数えてちょうど九十年となるため、それを記念した年史企画展「燦たる理想をめざして——大学昇

格九十周年記念展——」を開催することになった。

一 壁面解説パネル

企画展示室には、現物資料を展示するための大型ケース一基と、写真パネル用の展示台二基が設けられている。さらに、壁面を利用して数点の解説パネルが掲げられるようになっている。

今回の企画展では、順路に従い、最初に「ごあいさつ」のパネル、その横に大型パネルを掲げ、さらに大型展示ケースの左右に中型のパネル二枚を設置した。

「いあさつ」

「いあさつ」の文面は次のとおりである（パネル本文は横書き）。

年史資料展示室では、平成24年度の企画展として「燦たる理想をめざして——大学昇格90周年記念展——」を開催いたします。

本学は、明治19年（1886）11月4日に大阪西区京町堀の願宗寺で西日本唯一の法律学校である関西法律学校として創立され、その後、大正11年（1922）6月5日には大学令による大学として認可されました。その昇格から今年はいよいよ90年を数えます。

大正7年（1918）に公布された大学令は、私立大学にも帝国大学と同等の資格を認める法令であり、当時の本学首脳陣はその基準をみたすため、北摂の千里山に広大な敷地を求め、学舎を建設し、教育施設の充実を図りました。

今回の企画展では、大学昇格にいたる経緯や当時の様子、昇格を契機に作られた「学歌」や「学報」など



「ごあいさつ」のパネル

について、パネルや写真で解説するとともに、ゆかりの品を展示いたします。また、学内外の建物や風景から8つを選び、大学昇格のころと現在の景観を対比して紹介しています。見比べて、90年前に想いをほせていただければ幸いです。ちなみに、本企画展のタイトル「燦たる理想をめざして」は学歌の歌詞の一節から

とりました。

最後に、開催にあたってご協力をいただきました関係各位に深甚なる感謝の意を表します。

大型パネル「大学昇格と千里山キャンパス」

大型パネルには「大学昇格と千里山キャンパス」というタイトルを付け、五つの項目に分けて写真と次のような解説文で当時の状況を概観した（パネル本文は縦書き）。

1・昇格の機運

明治十九年（一八八六）十一月四日、大阪西区京町堀の願宗寺で創立した関西法律学校は、明治三十六年（一九〇三）に初めて自前の校舎を西区の江戸堀に建て、その三年後には北区の福島に新たな学舎を建設した。この時点で本学は、すでに「関西大学」の名称を使用していたが、法律的には専門学校令に基づく大学であった。

大正七年（一九一八）十二月六日、文部省は大学令を公布し、帝国大学以外の公私立大学に対しても同等

の資格を認めることを発表したが、本学は福島学舎を建設したところから、近く大学令が公布されるという予想のもと、施設の整備と充実に努めていた。

大学令による大学への昇格を実現させるためには、社団法人から財団法人への組織変更とともに、広大な校地や学舎など、教育施設の充実が不可欠であった。そのために拡張委員会が設けられ、新校地探しを続けた結果、大正九年（一九二〇）四月に大阪府三島郡千里村の土地一万五千坪を入手することができた。

【写真】大正十年ころの関西大学建設予定地（中央に白く見えるのは電車の軌道）

2・昇格の実現

大学昇格のためには多額の資金が必要であった。法学部と商学部の二学部設置を計画していた本学の場合、文部省へ納める供託金は六十万円にのぼり、その資金を調達するため、大阪財界の巨頭、山岡順太郎（数々の大企業の社長や重役、さらには大阪商業会議所の会頭も務める）を会長とする関西大学教育拡張後援会を



大型パネル「大学昇格と千里山キャンパス」

設置し、実業界の援助を仰ぐべく積極的な募金活動を展開した。

大学設立認可申請書は大正十年（一九二一）二月五日付で文部省に提出され、予科校舎の建築工事も同年七月に始まった。

千里山学舎で初めての建物となる予科校舎が翌大正十一年（一九二二）四月下旬に完成して間もない六月五日、本学はついに悲願である大学昇格を果たした。これで名実ともに真の大学となったのである。

【写真】 大学昇格と千里山キャンパスの充実に尽力した

山岡順太郎総理事

3・学の実化（じつげ）

山岡総理事（のちに学長も兼務）は、新しい大学の指導理念として「学の実化（じつげ）」を提唱した。①学理と実際との調和 ②国際的精神の涵養 ③外国語学習の必要 ④体育の奨励の四つからなるこの理念は、その後、本学の学是として定着する。

大学昇格を果たした新生のいぶきを強く感じさせた

のは「学の実化」講座の開始であった。大学の講義では得られない実際的な知識を取り入れることがこの講座の目的で、大正十一年（一九二二）五月から昭和二年（一九二七）十一月まで、五年半の間に三十三回開催されている。

ほかに、大正十三年（一九二四）一月の皇太子殿下御成婚を記念して、同月二十六日から三十一日まで多彩な行事を繰り広げた「エデュケーション・ウィーク」や、学外の社会人を対象にした夏期語学講習会など、「学理と実際との調和」をモットーに、大学教育に新機軸を生み出そうとする催しが次々と実施されたのである。

【写真】 第一回「学の実化」講座で講演するポール・ク

ローデル駐日フランス大使（大正十一年五月）

【写真】 第一回夏期語学講習会（仏語科）の参加者

4・施設の充実

山岡総理事は教授陣の充実や海外派遣留學生制度の確立などに力を注いだ、その一方で体育を奨励する

ために、テニスコートや相撲道場などの運動施設も充実させていった。なかでも、半円形スタンドを有し、当時「東洋一」と称された大運動場の建設にあたっては、率先して私財を投じたと伝えられている。

大正十五年（一九二六）十月二十三、二十四両日には、この大運動場の完成を契機として、創立四十周年と昇格記念式を兼ねた大学祭が開催された。多数の観客を集めた大学祭はその後毎年行われ、大阪名物の一つにまでなった。

【写真】 第一回大学祭入口アーチ（現在の正門付近）

【写真】 第一回大学祭の開催を報じる大正十五年十月

二十三日付朝日新聞

5・学生たちの活躍

このような施設面での充実が、大正末から昭和初期における課外活動での華々しい活躍へと結びついていく。スポーツの分野でまず関西大学の名を高めたのは相撲部である。大正末期には福井清吉（第三代）や竹田繁七（第五代）らの学生横綱を輩出して黄金時代を

築いた。

また、相次いで海外遠征が行われたのも、この時期の特徴である。他に先駆けて海外（上海）へ遠征したのはサッカー部で、大正十四年（一九二五）のことであつた。

野球部の海外遠征は大正十五年（一九二六）夏から始まる。朝鮮各地を転戦して好成績を残した。昭和四年（一九二九）には満州（中国東北地区）、翌五年（一九三〇）にはアメリカ遠征、八年（一九三三）と十一年（一九三六）には二度にわたつてハワイ遠征を行い、関大野球部の実力を強く印象づけた。

大運動場での練習成果を最も大きく発揮したのは陸上部である。昭和七年（一九三二）のロサンゼルス五輪には大島鎌吉（三段跳び）と長尾三郎（槍投げ）が出場し、大島は三位となって銅メダルを獲得した。昭和十一年（一九三六）のベルリン五輪には大島、長尾、谷口陸生、福田時雄、戸上研之、古田康治の六選手が出場している。日本記録だけでなく、世界記録保持者が綺羅星のごとく存在する陸上部の黄金時代であつた。

また、運動部だけでなく、文化部の活動も盛んであつた。弁論部は夏休みごとに地方遊説を行つて「雄弁関大」の名を広めた。ほかにも数多くの文化部が多彩な活動を行っている。このように、千里山の豊かな自然を舞台にして、のびのびとした学生生活が繰り広げられた。

その後、時には厳しい時代も経験したが、大学に昇格して九十年の月日が流れた今も、千里山キャンパスではさまざまな形のキャンパスライフが展開され、学生たちが自由を謳歌している。

【写真】 大正十五年、第五代学生横綱になり、提灯行列をする竹田繁七

【写真】 朝鮮に遠征した野球部（大正十五年、ソウル駅前）

【写真】 ロス五輪の三段跳びで銅メダルを獲得した大島鎌吉選手

【写真】 大正十四年の雄弁大会

中型パネル「長き歴史 〈関西大学学歌〉」と

「大学 学生 校友間の絆〈学報〉」

大学昇格を契機として新しく誕生したものに学歌と学報がある。展示ケースの両サイドにこれらのことを解説した中型パネルを掲げ、千里山キャンパスの開設に伴った新生の息吹を紹介した。

「長き歴史 〈関西大学学歌〉」の解説文は次のとおりである。パネルでは、解説文の下に作曲家・山田耕筈と作詞者・服部嘉香の写真とプロフィールをあわせて入れて画面を構成した（本文は縦書き、プロフィール文は横書き）。

「自然の秀麗 人の親和」で始まる「関西大学学歌」は、今から九十年前の大正十一年（一九二二）九月、大学に昇格してほどなく制定された。

校歌はすでにそれ以前から存在していたが、新たに総理事となった山岡順太郎の強い意向を受けて、新時代の到来を象徴する「大学の歌」が待望されたのである。従来の「校歌」という呼び方を「学歌」と改めた

のも、そういう理由からであった。作詞は関西大学教授の服部嘉香、作曲は音楽界に新風を吹き込んだ山田耕筈に依頼された。

学歌の作詞にあたって本学首脳陣は「真理の討究」と「人格の陶冶」を軸とし、「学問の実際化」「自由の訓練」「自治の發揮」などの文言を織り込むよう要望し



中型パネル「長き歴史 〈関西大学学歌〉」

た。さらに、ひとまず完成した歌詞に対しても、服部と山岡総理事、宮島綱男専務理事の三人が、前後三回にわたって推敲を重ねたことが記録に残っている。

一方、学歌完成後、作曲者の山田耕筈は歌唱指導と講演、さらにレコード制作のため、三度本学を訪れている。特にレコード制作の際には、声楽に適合するよう第二節の「学の実化」を「じつげ」と発声することや、第三節にあった「自由の訓練 自治の發揮」という歌詞を「自由の尊重 自治の訓練」と改めている。

山田耕筈による二長調のメロディは、理想に向かって進む学生の意気を力強く歌い上げるとともに、莊重にして高い格調により、今後も関西大学のシンボルソングとして永く歌い継がれていくであろう。

【写真】 山田耕筈

明治19年（1886）～昭和40年（1965）

東京音楽学校声楽科（現在の東京芸術大学）を卒業し、日本語の抑揚を活かしたメロディで数多の作品を残した。西洋音楽の普及にも努め「からたちの花」にあ

かとは「べチカ」などの童謡をはじめ、多くの楽曲が今に伝わっている。

【写真】 服部嘉香

明治19年（1886）～昭和50年（1975）

早稲田大学英文科を卒業し、早稲田大学講師を経て、大正10年（1921）から大正14年（1925）まで関西大学に奉職する。文学者であり、創作活動もしており、豊かな学殖をもとに学歌を作詞した。正岡子規の遠縁にあたる。

もう一点の中型パネル「大学 学生 校友間の絆（学報）」の解説文は次のとおりである。解説文の下には転換点を迎えた時の「学報」各号の表紙を写真で入れた（本文は縦書き）。

「学報」は大正十一年（一九二二）六月五日の大学昇格を記念する事業の一つとして創刊され、八月と十二月を除いて年十回、定期的に発行された。昭和四年（一

九二九）六月発行の七十号までは「千里山学報」と称していたが、同年七月の七十一号から「関西大学学報」と改められた。改称のきっかけは同年の天六学舎新築であった。「千里山」だと学部と予科だけの「学報」ではないかという意見が出されたためである。

当初「学報」は、大学と校友、学生間の情報連絡誌



中型パネル「大学 学生 校友間の絆〈学報〉」

的意味あいが高く、副次的に学説や研究論文が掲載されていた。そして次第に研究誌としての役割が強くなったが、別の研究雑誌が刊行されたことにより、再び校友間や学内情報連絡誌としての性格を有するようになった。しかし、戦時色が濃くなり、大学規模の縮小や用紙統制などの事情によって昭和二十年（一九四五）三月には休刊に追い込まれた。

戦後、大学制度改革に伴う新制大学への移行に向けて、昭和二十二年（一九四七）に「学報」は復刊され、特に十二月発行の第二二六号「関大ルネッサンス特集号」は戦後の荒廃した学生たちの心に勇気と希望を与えるものとなり、以後「学報」は再び大学、学生、校友間の連絡機能的役割を果たすようになった。

しかし、時代の推移とともに、校友の情報については、昭和三十年（一九六五）五月から発行されるようになった校友会の機関紙「関大」が担うようになり、学内の情報は昭和三十六年（一九六一）四月から発行された「関西大学広報」に引き継がれた。

学園紛争期に入り、昭和三十六年以來、不定期刊行

であった「学報」は昭和四十三年（一九六八）三月発行の第三五〇号をもって、ついに四十六年に及ぶ歴史の幕を閉じた。翌昭和四十四年（一九六九）六月から広報委員会が編集して発行するようになった「関西大学通信」が学生に対する情報紙の役割を受け持つようになった。

関西大学の機関誌は、戦争、学園紛争という二つの激動期を乗り越え、姿を変えながら、九十年前の大学昇格時から連綿とその歴史を紡いでいるのである。

【写真】「千里山学報」創刊号

【写真】「関西大学学報」第七一号

【写真】「関西大学学報」第二二六号

【写真】「関西大学通信」第一号

さらに、年史編纂委員会委員の一人である山野博史法
学部教授から「全国高級学校所在地図」の提供を受ける
ことができた。この地図は大正12年（1923）1月1
日に発行された『中學上級生』（第2巻第1号）という雑
誌の付録で、この時点で存在する（一部予定も含む）全

国の大学や旧制高校、専門学校などを網羅したものであ
る。この地図からは当時、大阪で高級学校の条件にあて
はまる私立大学は本学だけであったことが分かり、その
点でも貴重な資料と言える。パネルには、それを踏まえ
た以下のような解説をつけた。

全国高級学校所在地図

大正12年（1923）1月1日発行、『中學上級生』
（第2巻第1号）という雑誌の付録である。立案・編集
者である出口 競が「本地圖は、少くも日本に於ては
最初のものである。一般の刊行物として無いは勿論、
雑誌の附録として添附するが如きは、正に破天荒の企
てと言はねばなるまい」と略説でしるすように、この
時点で存在する（一部予定も含む）全国の大学、旧制
高校、専門学校などを網羅した貴重な地図である。

同誌は、さらに上級の学校への進学を志す旧制中学
生を主な読者としたと思われるが、どのような学校が
各地域に設置されていたのかという教育行政の観点か
ら見ても興味がつきない。



「全高所在地図」

この地図は、関西大学が大学令に基づいて昇格した直後に発行されたものであるが、大阪では、高級学校の条件にあてはまる私立大学は、本学だけであったことがこの地図から読み取れるのである。

提供 山野博史関西大学法学部教授

二 写真展示台のパネル

耐震補強工事の施工に伴い、平成二十四年度からは写真展示用の台が二基となり、それぞれ四面ずつ、あわせて八枚の写真パネルを掲出する形になった。

今回の企画展では、九十年前に千里山キャンパスが開設された当初の写真と、同じ場所で現在の様子を撮影した写真を上下に並べて、いわゆる「今昔物語」的な構成にしてみた（写真解説は横書き）。

《写真パネル1 空から見た千里山キャンパス》

【写真】空から見た昭和4年（1929）ころの千里山学舎

空から見た昭和4年（1929）ころの千里山学舎である。当時は軍事的理由から航空写真に強い制約が加えられたことを考えると、貴重な写真と言える。キャンパス中央には大正15年（1926）に完成したグラウンドがあり、その左斜め上に大学本館と図書館が見える。道をはさんでコの字形の予科校舎があり、キ

キャンパス周辺には民家も少なく、学歌に謳われている「自然の秀麗」そのものの景色が広がっていた。

【写真】平成21年（2009）の空から見た千里山キャン

パス

平成21年（2009）の空から見た千里山キャンパスである。敷地面積は約35万㎡（11万坪弱）で、大学昇格時が約5万㎡（1万5千坪弱）、だったことと比較すれば、90年の歳月を経てキャンパスは約7倍に拡大したことになる。

《写真パネル2 大学本館から第1学舎へ》

【写真】住友合資会社本社

【写真】昭和2年に完成した「大学本館」

大学本館は、北浜にあった住友合資会社の本社建物を受贈して移築した。竣工式は昭和2年（1927）6月に昇格5周年記念式典と合わせて挙行された。四半世紀に亘って学部生の学びの舎であった大学本館は、昭和29年（1954）、老朽化のため取り壊された。

【写真】昭和30年から平成7年までの第1学舎1号館

【写真】平成8年に完成した「第1学舎1号館」と「あすかの庭」

大学本館の跡には、昭和30年（1955）、大学創立70周年を記念し、法文学舎として「第1学舎1号館」が建てられた。その後、平成8年（1996）に現在の「第1学舎1号館」と「飛鳥の庭」に生まれ変わった。

《写真パネル3 大学図書館の移り変わり》

【写真】建設中の図書館

【写真】昭和3年に完成した「大学図書館」

昭和2年（1927）6月に建設工事が始まり、翌3年（1928）4月に竣成した大学図書館は、鉄筋コンクリート造の建物で、図書館部分は3階建、書庫は5階建であった。高い天井や随所に施された意匠などが、昭和初期の建物らしい雰囲気を漂わせている。

【写真】現在の「簡文館」

図書館は、昭和30年（1955）に大幅な増築が行われ、のちに文化勲章を受章する建築家・村野藤吾の設計による円形部分が付け加わった。その後、昭和60年（1985）2月の総合図書館完成に伴って移転。平成6年（1994）には博物館が開設された。この建物は、平成19年（2007）に国の登録有形文化財となり、博物館や年史資料展示室などの施設として現在に至る。

《写真パネル4 予科校舎》

【写真】予科校舎見取り図

【写真】大正11年に完成した「予科校舎」

大正11年（1922）4月下旬に完成した木造2階建の予科校舎は、千里山キャンパスで最初に建てられた校舎である。同年5月1日に始業式を挙行、予科新校舎での授業が始まった。残念ながらこの建物は昭和9年（1934）12月、火災により全焼した。

【写真】大学本館の八角ドームのデザインを受け継いで

予科校舎の場所に建つ「以文館」

予科校舎があった場所には現在、法科大学院等の建物である以文館が建っている。両脇にある八角ドームは、昭和2年（1927）から同29年（1954）まで存在した大学本館のシンボルをモチーフにデザインされている。

《写真パネル5 大学正門》

【写真】大学昇格時の正門

【写真】現在の15号門

大学昇格時から戦後しばらくまでの間、大学の正門は現在の以文館の西側、法文学舎へと通じる道の途中にあった。現在も大学の門として学内の出入りに使用されている。

【写真】昭和27年に完成した大学正門

【写真】現在の大学正門

大学の正門は昭和27年（1952）2月に現在の場所へと移った。重厚な門扉や守衛室等を設置し、新制



写真パネル5
大学正門



写真パネル6
クラブハウスから以文館へ



写真パネル7
大運動場



写真パネル8
大学駅前と大学前通り

大学にふさわしい正門となり、周囲の景色を大きく一新させた。さらに平成8年（1996）、新関西大学会館北棟と南棟の建設に伴い、正門付近も大幅に改修され、総合大学の正門として、堂々たる景観へと姿を変えた。

《写真パネル6 クラブハウスから以文館へ》

【写真】 建設中のクラブハウス

【写真】 大運動場開場式当日（大正15年10月23日）

大正15年（1926）10月に落成したクラブハウスは、木造瓦葺2階建の瀟洒な建物で、地下室を含めて総坪数150坪（500㎡弱）、応接室や歓迎室、読書室など、11の部屋を有し、学生の集会などに使用された。

【写真】 上の写真と同じアングルで撮った現在の景観

クラブハウスは外観をそのままに、一部改修しながら、平成14年（2002）まで健康管理センターとして学生、教職員の診察、治療に活用された。平成15年

（2003）、法科大学院棟である以文館の建設に伴って取り壊された。

《写真パネル7 大運動場》

【写真】 造成中の大運動場

【写真】 左からクラブハウス、予科校舎、大学本館、図書館を一望する大運動場

大学にとって、運動場は欠かすことのできない施設である。その大運動場の建設にあたって、時の総理事であった山岡順太郎は2万5000円の巨費を寄付したと伝えられている。400mトラックと13段のコンクリート製スタンド（6000人収容）を有し、大正15年（1929）に完成した大運動場は、当時東洋一のグラウンドと称された。のちにこの大運動場は「第1グラウンド」と呼ばれるようになった。

【写真】 以文館や尚文館（大学院棟）などが建つ現在の景観

「第1グラウンド」の南半分は、昭和60年（198

5)、日本の大学図書館としてはトップクラスの設備と規模を誇る総合図書館として生まれ変わった。さらに平成12年(2000)には北側部分に大学院棟である「尚文館」が建てられた。

《写真パネル8 大学前駅と大学前通り》

【写真】 大学前駅から周辺を臨む

【写真】 現在の関大前駅(千里山方向を臨む)

上左は大正12年(1923)ころの「大学前駅」である。大正10年(1921)、北大阪電気鉄道(現在の阪急電鉄千里線)が豊津駅から千里山駅まで延び「花壇前駅」が、翌年には「大学前駅」が開業する。「花壇前駅」は開業以来、何度も駅名を変更し、昭和39年(1964)に「大学前駅」と統合して現在の「関大前駅」が開業した。

【写真】 果樹が植えられ、のどかな風景が広がる大正10年ころの大学前通り

【写真】 現在の大学前通り

上左は大正10年(1921)ころの大学前通りである。正門へと通じる道のまわりには、桃や柿などの果樹園が広がっていた。現在は飲食店やコンビニエンスストア、ゲームセンターなどが立ち並び、にぎやかな学生街となっている。

三 現物展示

大型展示ケースの中には、大型パネルの解説に沿った形で、大正末から昭和初期にかけての現物資料を展示した。

大学昇格直後の新しい展開である「学の実化」講座に関連し、講師として来学した犬養毅が芳名録に残した揮毫。

「大學設立認可申請書」と「大學令ニ據ル 關西大學學則」。

学歌に関連して、昭和初期の蓄音機と学歌・応援歌のSPレコード。

学歌の作詞者である服部嘉香が作詞し、藤井清水が作曲、竹久夢二が表紙の絵を描いたセノウ楽譜「雨の泣く

日は」。

さらに第五代学生横綱となった竹田繁七が、約四十年後に西日本学生相撲連盟から記念品として贈られた「絹の横綱ミニチュア」などである。解説文は次のとおりである（記述は横書き）。

犬養 毅の揮毫

大正12年（1923）4月29日、第13回「学の実化」講座の講師として招かれた犬養 毅（当時逋信大臣、のち総理大臣）は「確固不動の信念を樹立せよ」という演題で講演を行った。その際、来学記念として「畏るる所 無し」としたのが、この芳名録である。来学から9年後の昭和7年（1932）5月15日、総理公邸に乱入した海軍の青年将校と陸軍士官候補生らの凶弾に倒れた。享年77歳。世に言う5・15事件である。

「大學設立認可申請書」と「大學令ニ據ル 關西大學學則」

右は、大正10年（1921）2月、文部省に提出された申請書である。認可されるまでに1年4カ月を要した。

左は、大学昇格を果たした翌年の大正12年（1923）2月に発行された「学則」である。それまでの「学則」と異なり、表紙に「大学令ニ拠ル」と特記されている点の特徴である。

この「学則」の表紙裏には文部省から届いた認可書の写しが印刷されており、認可書の現物が残っていない今では、これが大学昇格を証明する拠り所の一つとなっている。

昭和初期の蓄音機

蓄音機本体右側に差し込んだクランク棒で巻いたバネの力によりレコード盤を回転させるようになっていた。本体には、一定時間ごとに交換するレコード針入れもついている。

寄贈者の父上が昭和6年（1931）に購入したものであるという。寄贈 中嶋英文氏（サヌキ蓄音機愛好会）

学歌・応援歌SPレコード

日本コロムビア蓄音機株式会社が発売した関西大学学歌と学生歌を収めたSPレコードと歌詞カード。

寄贈 中嶋英文氏（サヌキ蓄音機愛好会）

セノウ楽譜 「雨の泣く日は」

服部嘉香作詞 藤井清水作曲 竹久夢二画

服部嘉香と藤井清水、竹久夢二のトリオが作った楽譜である。レコードが普及する前、楽曲と歌詞は楽譜として出版されることが多く、曲のイメージにあわせて表紙を挿絵画家が描いた。竹久はセノウ楽譜集の挿絵を280枚ほど描いている。

藤井は山田耕柞の推挙で作曲を始め、セノウ楽譜から29楽譜を出版している。最初は竹久の詩に作曲していたが、のちに北原白秋や野口雨情の詩を好んで作曲するようになった。



現物展示の様子

関西大学学歌の作詞者である服部は、本学に赴任する前から藤井とコンビを組んで流行歌を世に出していた。関西大学の学歌も、当初は服部と藤井のペアで作られたが、残念ながら採用には至らず、山田耕筰が作曲することになった。

練絹の横綱ミニチュア

大正15年（1926）、第5代学生横綱となった竹田繁七が、昭和60年（1985）6月、西日本学生相撲連盟の名誉会長に就任したときに贈られた横綱のミニチュアと感謝状

四 燦たる理想をめざして

大正十一年（一九二二）に悲願の昇格を果たし、名実ともに大学となった本学は、爾来九十年、日本でも有数の一大総合学園に成長した。

本学にとって、大学昇格がいかに重要な意味を持つことであるのか、ということは、毎年六月五日を昇格記念日として、本学独自の休日に行っていることでも理解でき

よう。また、昇格直後、ときの総理事・山岡順太郎が提唱した「学の実化」は、すでに本学の学是とされ、燦たる未来に向かって歩むべき指針となっている。

千里山キャンパスの開設と大学昇格は、関西大学の歴史上、重要なエポックである。このことを年史編纂室は、学生をはじめ、教職員や校友、父母、さらには学外にも引き続き強く周知していかなければならない。九十年の節目は、そのことを改めて強く認識する機会であった。

熊 博毅（くま ひろき・学術情報事務局次長）